



バッハの森通信

第123号
2014年
4月20日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

永遠の喜び

2500年、歌い継がれた歌を歌おう

鹿が谷底に水を喘ぎ求めるように
私の魂もあなたを喘ぎ求めます、神よ。
私の魂は生ける神を求めて渴いています。
いつ私は行って
あなたのみ顔を仰げるのでしょうか。
私には昼も夜も涙がパンです。
一日中お前の神はどこにいるのか、と言われて。
私は思い出して胸が一杯になります、
祭りを祝う歓呼と感謝の叫びの中、神の家まで
大勢の人々の間を通り抜けて行った時のことを。

詩篇 42 編 2 - 5 節

* * *

何らかの理由で、エルサレム神殿から追放されて
悲しみ絶望する人が、かつて大勢の人たちと一緒に
祝った祭りの感動を思い出し、いつになったら再び
神殿に行って、み顔を仰ぐことができるのでしょうか、
神様、と嘆いています。幸い、その後、彼はエルサレムに
戻り、この詩篇を奉納することができたのでしょ
う。結局、エルサレム神殿で1000年にわたり歌い継が
れた讃美の歌集、「詩篇」に収録され、後世に伝えられ
ましたから。

それから約1000年たった頃、キリスト教徒は、
この詩篇を、福音書朗読の前に朗誦することにしまし
た。福音書はイエス・キリストの言葉ですから、
谷底にわずか残った水を喘ぎ求める鹿にも似た思い
でみ言葉を渴き求める信徒の心を、この詩篇に託し
たのです。

このように、ラテン語のミサ式文になって、更に
1000年ほど歌い継がれたこの詩篇は、16世紀にな
ると、宗教改革の波の中で、民衆にわかる言葉として、
フランス語の韻律詩に翻訳され、それにルイ・ブル
ジョワが新しい旋律をつけました。すると、すぐド
イツ語に翻訳され、その歌詞と旋律に魅了された民
衆の間で広く愛唱されるようになりました。これを
詩篇歌と呼びます。

ここで更に新しい展開が起りました。「鹿が谷底

に水を喘ぎ求めるように／私の魂もあなたを喘ぎ求
めます、神よ」という詩篇の言葉とは別に、ブルジョ
ワの旋律を借りて、それに他の歌詞がつけられたの
です。当時、ルター以来、多数の会衆歌（コラール）
を創り出したドイツ人は、名旋律に元歌とは別の歌
詞をつける「替え歌」も、少なからず作りました。
それが民衆に愛唱され、元歌より有名になった「替
え歌」もありました。これもその一つです。

喜べ、わが魂（タマ）、／悩みを忘れ。
主の声に応え（コタ）、／嘆きの谷の
悲しみ去りて／喜び目指せ、
聞きしこともなき／永遠（トワ）の喜びを。

これは、10節ある詠み人知らずの埋葬歌の第1節
です。「嘆きの谷」とは「この世」、「永遠の喜び」とは、
天の王国に行つて主のみ顔を仰ぐ「終わることのない
喜び」を意味します。ですから、その喜びを目指せ、
と歌うコラールは、単に旋律を借りただけではなく、
神を喘ぎ求める元歌の詩篇と同じ思いを歌っている
のです。

16世紀に詩篇歌やコラールとして民衆が愛唱した
歌が、それまで2000年も歌い継がれてきた詩篇で
あったことは驚きです。それからまた500年以上の
歳月が流れ、大量生産と大量消費のめまぐるしい変
化に揉まれて生きている私たちには、ほとんど理解
しがたい悠長な話に見えます。しかし、歴史を学ぶと、
彼らはただ悠長に暮らしていたわけではありません。
それどころか、むしろ今の私たちより、はるかに必
死になって生きていました。だから「永遠の喜び」
を求める詩篇に彼らは時代を超えて共感したのです。

* * *

以上は、先月開いたレクチャーコンサート「詩篇
を歌う」で語ったことのエッセンスです。コンサ
ートで私たちは、昔の人たちが求め続けた「永遠の喜び」
の感動の追体験を目指し、参加者全員で歌いました。
残念ながらこれらの感動的な音楽を、紙上で再現す
ることはできません。

皆さん、2500年の歳月を通して伝えられてきた歌
を、ご一緒に歌いませんか。時代を超えて共感でき
る経験は、本当に楽しいですよ。（石田友雄）

創立記念レクチャーコンサート 「詩篇を歌う」

(2014年3月23日)

感動した詩篇の切なる祈り

コンサート冒頭に、プログラム全体を見渡して、エルサレム神殿で歌い継がれた詩篇が、グレゴリオ聖歌、ドイツ語とフランス語の詩篇歌、替え歌コーラルへと形を変えていったことについて、石田友雄先生のレクチャーがありました。何しろ紀元前10世紀から16世紀まで、2600年にわたる歴史ですから、時間制限がなかったら、お話は深夜にまで及んでいただかかもしれません。

続いて、3篇の詩篇を、日本語で朗読、ラテン語で朗誦・合唱、ドイツ語で斉唱、日本語で会衆斉唱、最後に宮本とも子先生がオルガン独奏をするという構成のプログラムでした。様々な言語で歌ったクワイアの皆さんは大変だったと思いますが、詩篇が教会音楽にどのように受容されていったのが概観でき、興味深く聴かせていただきました。また作品の中に詩篇の切なる祈りが歌い込まれている様子を聴き取ることができ、とても感動しました。

バッハの森のコンサートでは、必ず客席も一緒に歌う「会衆斉唱」がありますが、今回は特にたくさん歌いました。「喜べ、わが魂」はG.ベームのオルガン・パルティータと交互に会衆が第9節まで歌い、クワイアが第10節をバッハの編曲で歌いました。「流れ行くバビロン河の岸边に」は全5節を省略なしで歌いました。「時間をかけて、繰り返し、繰り返し」歌いながら、これもバッハの森で語られる「ユーブング（修練）」の一つかなと思いました。「修練」という言葉には「心身に厳しいことを課す」というイメージがありますが、当時の人たち、特に会衆は、それまで教会では聖歌隊がラテン語で歌っていた聖歌を、自分たちの言葉で声を合わせて歌うことを楽しみ集まっていた。それが、16世紀に詩篇歌やコーラルが急速に広まった背景だと説明されました。

新しい発見があるバッハの森

私はバッハの森では新米の方で、一昨年からは金曜日の「オルガン音楽研究会」と「コーラル研究会」に参加し始めました。3年前の初回のテーマ、「主の祈り」は、まだ記憶に新しく、そのとき石田先生が、

少年時代のバッハが毎日歌っていたと思われる「新アイゼナハ聖歌集」を紹介してくださいました。その中の教理問答6項目を表した美しい銅板画図を見たとき、自分がいかにバッハという人を知らずにいるかに気付かされ、バッハを生み出した土壤をもっと知りたいと強く思いました。

昨年未までに『クラヴィアユーブング第III部』とそのコーラルを通して、バッハがルターから受け継いだことや、オルガン作品やカンタータがバッハ自身のユーブングの賜物であることを学びました。今年に入ると、「オルガン音楽研究会」でも詩篇が詳しく取り上げられ、今回のコンサートの予習になりました。バッハの森に来ると、毎回必ず新しい発見があります。ドイツ語の言葉一つをとっても、直訳だけでは想像できない大きな世界が広がっていることに驚かされます。このような学びの場に出会えたことを感謝し、これからも勉強を続けていきたいと思っています。(鴨川華子)

いることに感謝を覚えた空間

今年のバッハの森創立記念レクチャーコンサートに、クワイアのメンバーとして参加させていただきました。そこでした「不思議な体験」について、お伝えしたいと思います。

その前に、自分のことを少々お話しさせてください。ピアノという音楽を専門にする身でありながら、これまで私は、歌うことと縁遠い生活を送ってしまいました。子どもの頃は、天真爛漫(!)に歌っていたのですが、男の子たちにひやかされたのが原因でしょうか、いつか人前で歌うことに抵抗を覚えるようになりました。それから、時には自分の声で表現してみたいと思うことはあっても、苦手意識から脱却できずにいました。

30数年前、バッハの森が始まる前に、結婚してつくばに引っ越して来ると、夫が「筑波バッハ合唱団」のメンバーだったので、その仲間に入れていただきました。それから、バッハの森の草創期には、幼い娘を連れて、いくつかのプログラムにも参加しましたが、そのうち、いろいろあって、バッハの森のプログラムから遠のいていました。ところが、2年前に再度クワイアに飛び込みました。それと言うのも、石田友雄先生の「指揮者の比留間恵さんが歌わせてくださいますよ」という説得力のある一言が心に響

いたからです。

クワイアでは、恵さんの丁寧な発生指導に導かれ、友雄先生に、曲の背景、歌詞の意味などもご指導いただき、ラテン語やドイツ語の歌詞を何度も復唱しているうちに、自然に歌の流れができてくるという、興味深い経験をしました。歌詞になっている詩が私の心をつかみ、それを声に出して表現したくなるのです。こんな積極的な気持ちで歌う気になったのは驚きでした。

多くの学びと深い感動

今回のコンサートのテーマは「詩篇を歌う」でしたが、今回は本当に多くのことを学びました。コンサートでは初めに友雄先生の内容豊かなご説明をうかがい、詩篇に対する認識を新たにしました。その後、粛々と詩篇の朗読、朗誦が行われ、続く合唱では、皆さんの気持ちが一つになった空気が奏楽堂を満ちしました。ハンドベルの音色に癒やされ、奏楽堂一杯に鳴り響くオルガンの響きに感動しました。オルガン・パルティータと会衆斉唱のやり取りが面白く、当時の人々もこうやって楽しんだのだろうか、と思いをめぐらしました。

それにしても、前1000年紀に作詞された詩篇が、多くの偉人たちの努力の積み重ねによって受け継がれ、会衆歌として民衆の日々の生活に浸透し、彼らの心の拠り所になってきたことを肌で感じられ、感慨深い思いを抱くことができました。また、それが現代の私たちの心にも深く訴える力を持っていることは不思議な感動でした。これらの詩篇に基づく歌を原語で歌う心地よさとともに、友雄先生の邦訳歌詞が心に響き、思い切り日本語で歌うことの楽しさは、何とも言えないものでした。このように、内容の深い、心温まる時間を皆様と満喫できたことに感謝しております。

歌いたい、という不思議な体験

さて、冒頭で申し上げた「不思議な体験」ですが、コンサートの最中に思いがけないことが起こりました。本番のさなかに、前へ前へとどんどん引き寄せられるように声を出している自分に気付いたのです。歌うことに対する長年の苦手意識が全く嘘のようでした。そして、会衆斉唱のとき、この詩を歌いたい(!)、この旋律に入りたい(!)、それを声に出して遠くまで届けたい(!)という願いのようなものが湧き起こってきたのです。歌いながら、思わず目頭が熱くなるのを覚えました。演奏中に涙を流すわ

けにはいきません。何とか自分に言い聞かせながら、終わりまでクワイアメンバーとして歌い終わることができました。このような経験は、本当に初めてのことでした。歌うということに対して、今まで一体何にこだわってきたのか、不思議にすら思えました。

最後に、J. S. バッハのオルガン編曲「おお、人よ、涙せよ、汝の罪の大きなことに」(BWV 622)を、とも子先生が、ゆっくりとまるで語りかけているかのように弾くオルガンの響きが奏楽堂を満ちたとき、涙を押さえるのが難しくなりました。そして、この空間にいることに、感謝の念がこみ上げてきました。

1985年にバッハの森が創立された頃を思い出すと、つくばは、面影を留めることが困難なほどの勢いで日々変わっています。間違いなく、つくばは便利になり、その意味では快適になりました。しかし、時代の流れの足跡が見えにくくなっていくことに、えも言えぬ寂しい気持ちになることも否めません。

想像することも難しい古い時代から伝わる詩篇とその音楽を、先人たちがあらゆる努力をしながら受け継ぎ、大切に守り、世の中に広く浸透させるために心を砕いたお陰で、それが人々の心の豊かな糧になってきたことに大きな感動を覚えます。そして、それが現代の私たちの心も捉えてやまないことに驚き、私たちに欠かせない大切なものを教えてくれているように感じます。同時に、私たちもまた、歴史の流れの中に生きる者として、大事な役割を担っていることの思いを新たにしております。(平賀邦子)

* * *

寄付者芳名 (敬称略日付順)(2014.1.1～3.31)

下記の方々から計308,483円のご寄付をいただきました。

安積源也・和子・真和、山賀康弘、明治学院大学、中村東子、楽居つくば、松村治美、比留間恵、募金箱。

建物維持積立寄付 (敬称略日付順)(2014.1.1～3.31)

下記の方々から計122,500円のご寄付をいただきました。

松下雅弘、宮地陽子、徐淑子、関佑子、前川正子、堀内順子、鴨川華子、田中秀明、松村悠子、内藤節子、山口みどり、今野和子、塚越多恵子、柴川幸子、谷井澄子、畠中和華、秋山万友美、土井努、小関旦子、小関利紀也、中山佳奈恵、住田真理子、平賀啓二郎・邦子、榎本敬子、清水良子、水野賢司、大和久一吉、大江友子、小板橋又久、横田穰一・博子、渡辺恵子。

楽居つくば Gakkyo Tsukuba

シュニットガーの芸術を覚えて

ヨーロッパの田舎を旅なされた方は、きっとその美しい風景と文化レベルの高さに感激なされた経験がおありだと思います。都会の戦火から免れたということもありますが、歴史的なオルガンの数々は、そのような田舎に点在しています。

昨夏 15 年ぶりに訪ねた北ドイツの田舎で、17 世紀の名工、アルプ・シュニットガー (1648 - 1719) のオルガンと久しぶりに接し、留学時代に受けた感動を新たにするとともに、現在、シュニットガー・オルガンを世界遺産として登録する動きのあることを知りました。ブレーメンから車で小 1 時間ほど北に行ったところにある古城で、世界遺産登録を促すために開かれたシュニットガー記念晩餐会にもご招待を受けましたが、その席上、アルプ・シュニットガーのオルガンが世界遺産に登録される資質として、恩師のハラルド・フォーゲル氏は、次の 3 点を挙げられました。

1) 楽器の寿命の長さ、つまり、持続性が証明されていること。2) 楽器製作技術の頂点を極めていること。3) 楽器製作の芸術が国際的にも高く評価されていて、世界的に大きな影響力を持つこと。

歴史的オルガンを未来永劫にわたって大切にしたい、という欧米の恩師や仲間の意気込みに感動しましたが、ふと振り返ると、私自信もシュニットガー・オルガンの建造芸術から、日々恩恵を受けていることに気付かされました。シュニットガー・オルガンこそが、バッハの森のアーレント・オルガン、フェリス女学院大学フェリスホールのテイラー・アンド・ブーディー・オルガンの源泉だからです。日本国内には、この他にも、北ドイツ様式の楽器が多数あります。

そこで、ドイツからはるかに遠い東アジアの地でも、世界遺産への登録活動に少しでもお手伝いできないかと考え、この度ご縁があって、バッハの森から東に 10 キロほどの所に建てた住まいを、アルプ・シュニットガーの芸術を覚えて「楽居 (Gakkyo) つくば」と名付けました。歴史的な名器のあるヨーロッパの田舎の風情を残す場所で、家の裏は農園になっています。カルチャー (Culture) と農業 (Agriculture) が一つになる生活の場になることが夢です。北ドイツでシュニットガーのオルガン文化から学んだことを糧に、20 年以上、日本で仕事をさせていただいてきたことに感謝しつつ、「楽居つくば」を世界遺産登

録の動きを応援する場所の一つとして育てていきたいと願っています。

去る 3 月 18 日には、石田友雄先生にお願いして、「楽居つくば」の奉献式を執り行っていただきました。丁度、バッハの森のアーレント・オルガンの修復・調整作業に来ていらしたテイラー・アンド・ブーディー・オルガン工房の 2 人のオルガン・ビルダーと、彼らを世話してくださっていたバッハの森の 2 人のオルガニストにも参加していただき、「息あるものはこぞりて主を誉め称うべし、ハレルヤ」と詩篇 150 篇を交唱し、コラール「誉め称えよ、わが光の主」を斉唱しました。深く感謝しております。

(宮本とも子)

* * *

LETTERS / レターズ / たより

バッハへの学びは永遠です

2014 年 2 月 26 日

米国・タコマ

石田友雄先生

ご無沙汰しております。今週は宮本とも子先生がシアトル／タコマにいらして、クラヴィコードのやさしい嵐を起こしてくださいました。とも子先生が放つエネルギーは光のような強さと速さで私たちの心に届き、堂々たるバッハの演奏、繊細なクラヴィコードでの音楽造りに、私たちの目と耳と心が忙しの 1 週間でした。ご本人もおっしゃっていましたが、とも子先生の音楽が、バッハの森での学びを通して成長している様子、生意気ながら私の耳にもはっきり聴こえ、感動いたしました。友雄先生と一子先生のバッハの森の力はすごいです。本物は、たとえ形を変えることがあっても、時代の変化を越えて永遠に残り、続くものだと思えます。

筆不精でご無沙汰しておりますが、心の中ではなかなかお会いできないバッハの森の皆様や石田先生ご夫妻を訪ねていました。その時、いつも私が見ているヴィジョンは、一子先生が天国から友雄先生を励まし、元気付けておられる情景、一子先生の優しい香りが、バッハの森を包んでいる様子です。一子先生を知っている人なら誰でも覚えているチャーミングな笑顔、懐かしいです。バッハへの学びは永遠で、その途上にある私たちは幸せ者だと思えると、最後まで謙虚な気持ちで生きることができると思っています。バッハの森の皆様に宜しくお伝えください。

ピース。志賀菜穂美

価値を感じてもらおう音楽

2014年4月3日
ベルギー・ブリュッセル

石田友雄様

遅くなりましたが、バッハの森のオルガン修復事業にほんの少々参加できて幸いです。この寄付金は、約8年前から始めたハーディー・ガーディーのレッスンから得たものです。今、私の自宅で隔週開く個人レッスンに来る生徒が8人います。この楽器に関する知識を伝える共に、大切なことは、お金を稼ぐことではなく、人々に音楽の価値を感じてもらおうことだ、と教えています。なお、先日、ユーチューブで、パイプオルガンの修復作業を見ました。ひどい壊れ方とそれを完全に直す技術に驚きました (http://www.youtube.com/watch?v=p_lhQVrxDDk)。

ルプレヒト・ニーポルト

注1：ニーポルトさんは、草創期のバッハの森の活動に参加していた方です。

注2：ハーディー・ガーディーは、ハンドルで回転させる車輪で弦をこすって鳴らす楽器です。初めは修道院で用いられていましたが、後に辻音楽師の楽器になりました。ニーポルトさんは、手製のハーディー・ガーディーを試奏してくれました。

* * *

アーレント・オルガンの修復作業

(2014年3月)

テイラー&ブーディー・オルガン工房の技師、ロビー・ローソン氏とクリス・ボノ氏が、去る3月15日から5日間バッハの森に滞在して、アーレント・オルガンの修復作業と調律をしてくださいました。彼らは、3年前、3月11日の大地震で大破したオルガンを、同年8月末に5日間の突貫工事で見事に修復した人たちです。その時、数年後に、一部残った修復作業の完成と、耐震工事をしてもらう約束をして別れました。この約束に従って、今回の作業が行われたわけです。

今回の主な作業について、ローソン氏から次のような報告がありました。

- 1) 大きなパイプを支えるためのラックを追加した。これがあれば、3年前のパイプの損傷は大部分防げたと思う。(注：損傷の原因は、パイプがぶつかり合ったため起きた)。
- 2) オルガン・ケースの前と後ろをつなぐ対角支柱を取り付けた。これにより、地震の揺れに対して、

オルガン・ケースがはるかに強くなった。

- 3) ハウプトヴェルクのトランペット 8' とペダルのトランペット 8' について：すべてのシャロット(注：パイプ箱内の金属のチューブ)とリードの舌がひどく汚れていたの、これらの汚れを落とし、腐食防止ワックスを塗り、すべてのリードを再調整して、ヴォイスイングした。
- 4) 時間内に全パイプの調律は終われなかった。この他に、鍵盤とパイプの空気箱をつなぐ金属管のいくつかに、腐食による穴が開いていたので、応急処置としてビニールの布を巻きつけておいた。

ローソン氏は、次の言葉で報告を締め括りました。「いつもバッハの森を訪れ、このオルガンの修復・調律作業ができることを名誉だと思っています。またいつも通り、バッハの森滞在中の日々を、私たちは本当に楽しみました。皆さんの温かいおもてなしに深く感謝しております。再びうかがえる日を楽しみにしております」。

* * *

オルガン修復募金 (敬称略日付順)

(2013.12.16 ~ 2014.3.31)

下記の方々から計 57,174 円のご寄付をいただきました。熊谷徹、松下雅弘、宮地陽子、塚越多恵子、水野賢司、ルプレヒト・ニーポルト、石田友雄。

3年前の大地震によって大破したアーレント・オルガンの修復作業は、今回、ひとまず終わりました。今回の修復作業に関して、最初の見積りが2万ドルでしたので、目標額200万円の募金をいただきましたが、皆様のご協力により、2,192,932円(3月31日現在)の募金が集まり、3年前の募金繰り越し(124,696円)と合計すると、今回の募金総額は2,317,628円となりました。他方、今回の作業に関して、彼らに時間的余裕がなく、予定した耐震工事を完了できなかったため、請求額は見積り額より5,000ドル差し引いた15,000ドルになりました。そこで、4月16日に換算レート：1ドル=102円88銭で、送金手数料(2,500円)とともに、1,545,700円を払い込みました。従って、現在、オルガン修復募金には繰越金が771,928円あります。

さて、今回の修復・調律作業後、ローソンさんと話し合った結果、残った耐震工事の他、今後4、5年おきに保守・調律作業をすることが望ましいことが分かりました。そこで、募金繰越金は、「オルガン基金」として積み立てておこうと思います。

皆様のご協力で深く感謝いたします。(石田友雄)

- 1.9 春のシーズン開始
1.9, 16, 23, 30 運営委員会 参加者各4名。
2.6, 13, 20, 27 運営委員会 参加者4名、4名、3名、4名。
2.8 休館 雪のため。
2.20 出席 実務セミナー「公益法人等の新制度移行後の法人運営と定期提出書類の作成に関する研修会」(県庁) 1名。
3.6, 13, 20, 27 運営委員会 参加者各4名。
3.15～19 オルガン修復作業 テイラー&ブーディー・オルガン工房より、ロビー・ローソン氏とクリス・ボノ氏。19日に河内克彦氏参加。
3.22 バッハの森の運営を考える有志懇談会 参加者12名。
3.23 創立記念コンサート 参加者35名。
3.30 家族で楽しむ春休みの音楽会 参加者24名(大人20名、子ども2名、幼児2名)。

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ コラール・カンタータ研究 コラールとカンタータ (JSB)

- 1.11 新年祭のためのカンタータ「神よ、あなたの御名のように、あなたの誉れも」(BWV 171) ; コラール「主よ、誉めまつる」。オルガン: J. S. バッハ「私たちにこの年を果たし終えさせてください」(BWV 171 / 6)、當眞容子。参加者12名。
1.18 第365回、オルガン: J. S. バッハ「私たちにこの年を果たし終えさせてください」(BWV 171 / 6)、當眞容子。参加者10名。
1.25 顕現祭後第3主日のためのカンタータ「主よ、御意志(オノゾミ)通りに、私をお取り扱ってください」(BWV 73) ; コラール「みこころのままに」、「御神よりわれ去ることなし」。オルガン: J. S. バッハ「これは父のみこころです」(BWV 73 / 5)、笠間きよ子。参加者12名。
2.1 第366回、オルガン: J. パッヘルベル「主なる神、われらと共にいましたまわず」、笠間きよ子。参加者15名。
2.15 第367回、顕現祭後第4主日のためのカンタータ「神が、この時、私たちと共におられなければ」(BWV 14) ; コラール「御神この時に」。オルガン: J. G. ヴァルター「神が、この時、私たちと共におられなければ」、金谷尚美。参加者6名。
2.22 七旬節のためのカンタータ「お前の分を取り、あちらへ行け」(BWV 144) ; コラール「御神の御業はことごとく善し」、「絶えずみこころのなること願う」。オルガン: J. S. バッハ「私の御神がのぞまれること、それが常に起こるように」(BWV 144 / 6)、當眞容子。参加者13名。
3.1 第368回、オルガン: J. S. バッハ「御神がなさること、それは善いことをしてくださることだ」(BWV 1116)、當眞容子。参加者11名。
3.8 エストミヒのためのカンタータ「主イエス・キリストよ、真の人にして神よ」(BWV 127) ; コラール「主イエス・キリストよ」。オルガン: J. S. バッハ「ああ、主よ、私たちのすべての過ちを許してください」(BWV 127 / 5)、安西文子。参加者14名。
3.15 第369回、オルガン: F. W. ツァハウ「主イエス・キリストよ、真の人にして神よ」、安西文子。参加者14名。

学習コース

- バッハの森・クワイア(混声合唱) 1.11 / 14名、1.18 / 14名、1.25 / 13名、2.1 / 15名、2.15 / 9名、2.22 / 15名、3.1 / 12名、3.8 / 16名、3.15 / 12名、3.22 / 17名。
バッハの森・バロック・アンサンブル 2.1 / 6名、2.22 / 3名、3.8 / 5名、3.15 / 6名。
バッハの森・ハンドベル・クワイア 1.11 / 3名、1.18 / 4名、1.25 / 4名、2.1 / 4名、2.22 / 4名、3.1 / 4名、3.1 / 4名、3.8 / 4名、3.15 / 4名、3.22 / 4名。
オルガン音楽研究会 1.10 / 9名、1.24 / 8名、2.7 / 8名、3.7 / 8名、3.14 / 8名。
コラール研究会 1.10 / 8名、1.24 / 7名、2.7 / 8名、2.21 / 6名、3.7 / 7名。
クラヴィコード・オルガン教室 1.10 / 4名、1.24 / 2名、2.7 / 3名、2.21 / 4名、3.7 / 4名、3.14 / 3名。
オルガン・クラブ 1.17 / 2名、1.31 / 3名、2.28 / 3名。
読書会: 聖書 1.25 / 4名、2.1 / 6名、2.15 / 3名、2.22 / 6名、3.1 / 4名、3.8 / 4名、3.16 / 6名。
オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習 1.7 / 1名、1.8 / 1名、1.9 / 2名、1.10 / 1名、1.11 / 1名、1.13 / 1名、1.14 / 1名、1.15 / 1名、1.16 / 1名、1.17 / 2名、1.18 / 1名、1.21 / 2名、1.22 / 1名、1.23 / 3名、1.24 / 1名、1.25 / 1名、1.28 / 3名、1.29 / 1名、1.30 / 2名、1.31 / 2名、2.1 / 1名、2.4 / 1名、2.6 / 1名、2.7 / 1名、2.8 / 1名、2.12 / 3名、2.13 / 2名、2.14 / 1名、2.15 / 1名、2.18 / 3名、2.19 / 2名、2.20 / 2名、2.21 / 2名、2.22 / 1名、2.25 / 4名、2.26 / 1名、2.27 / 2名、2.28 / 1名、3.1 / 1名、3.4 / 3名、3.5 / 1名、3.6 / 3名、3.8 / 1名、3.11 / 3名、3.12 / 2名、3.13 / 2名、3.14 / 1名、3.15 / 2名、3.20 / 3名、3.22 / 1名、3.25 / 4名、3.26 / 2名、3.27 / 3名、3.28 / 1名、3.29 / 1名、3.30 / 1名、3.31 / 1名。